日本におけるカナダ研究

政府が各種の援助

カナダ大使館広報部部長　ブルース・バーネット

日本でカナダについての認識と理解を深めるために、カナダ政府はさまざまなプロジェクトを実施している。その中でも、学術関係は非常に重要な位置を占めている。

日加両国にとって、お互いが重要な国であることは言うまでもない。両国の関係は、わずかな一般的知識で事足れりという段階をとうの昔に過ぎ、現在、緊密な友好関係を着実に発展させるためにより深い認識が必要となっている。カナダとカナダ国民についての理解なくして、ある政治上、経済上の決定がなぜ出てきたのかを理解するのは難しい。例えば、カナダを動かしている諸要因は、米国のそれとは異なる。カナダ人に米国人と同じように振舞うことを期待するのは理に合わないし、はっきり言って不可能である。

だからこそカナダ政府は、日本でカナダについての認識を高め、あるいは深めるためにできるだけのことをしたいと考えている。両国の研究・教育機関の交流を盛んにすることも、その大切な一環である。

カナダ政府の学術交流計画には、大別して次の三本の柱がある。(1)主として大学院学生を対象とする奨学制度　(2)大学教師や研究者に対する助成　(3)日本の大学におけるカナダ研究講座の育成援助。

まず第一にカナダ政府は、カナダで修士号、博士号取得を目ざす日本の学生に総枠十六人の奨学金を提供している。毎年、新たに採用されるのは、平均八人ほど。対象は、カナダの歴史、文化、言語、法律、経済を学ぶ学生で、自然科学分野も時には対象となるが、その場合はカナダが国際的に高い研究実績をあげている分野に限られることが多い。奨学生に選ばれた学生は、将来日本に戻って指導的役割を果たすものと期待されている。

第二の柱の研究助成には、カナダ研究助成計画や図書の寄贈、カナダ学会など研究団体への助成がある。

カナダ研究助成計画は、日本の大学でカナダ講座を盛んにするには優秀な研究者の確保が不可欠だという認識のもとに、三年前に発足したものである。すでにカナダに関する関心も知識も十分備えておられる研究者も多いが、カナダ政府はその方々を含めて、より多くの研究者にカナダを直接訪れてもらい、新しい知識を仕入れ、また研究を深めてもらう方策の必要性を感じた。

助成の対象となるのは、すべてカナダに関する何らかの研究計画に携っている人である。自然科学者ももちろん、カナダに研究に来ているが、それは大学間で直接締結されている別個の交流計画によるものである。

カナダ研究助成計画の助成以外にも、カナダ大使館では日本で入手しにくい資料や書籍を提供したりして研究を手助けしている。同様にいくつかの大学にも図書の寄贈を行なっている。

日本におけるカナダ研究にとって最も重要な出来事のひとつは、一九七七年の日本カナダ学会（発足当時はカナダ研究会）の設立であろう。日本カナダ学会にはさまざまな分野の研究者が参加しており、年次研究大会や研究会、講演会を開くなどの活動をしている。カナダ大使館では、日本カナダ学会とカナダ文学会（一九八二年設立）に助成を行なっている。

カナダ政府が力を入れている三番目の柱は、日本の大学におけるカナダ講座の育成。両国政府は、日加文化協定でそれぞれの大学で相手国の研究を推進することになっており、日本では現在、筑波大学にカナダ研究講座が置かれてカナダから毎年客員教授が派遣されている。今年は四月にケネス・S・カーティス博士が着任し、同大学院地域研究研究科で教えている。同博士は筑波大学のほか、東京大学、慶応大学、国際基督教大学でも講義している。

政府レベルの学術交流とは別に、北海道の北海学園大学ではカナダ人教授のポストを設け、二年前からレスブリッジ大学（アルバータ州）と姉妹校となって教授を交換しあっている。また関西では、関西学院大学がカナダ人教授を招いており、この九月に三人目の教授が着任する。

日本の大学では、多くの優秀な日本人研究者がカナダを専門に研究しており、その数は次第にふえてきている。また、それらの人々を介して、カナダ人研究者が招へいされたりしている。例えばウインザー大学のアーレントラウト教授が、二年間の予定で筑波大学に招かれたのも、こうした先生方のおかげである。

これらのほかにも、日加間の学術交流の進展を示すプロジェクトや計画はたくさんあるが、以上でその進展の方向を概略理解いただければ幸いである。

また、カナダ政府は、こうしたプロジェクトをさらに拡大・充実するために、常に新しい方策を求めている。カナダの大学を卒業した日本人が集うカナダ大学同窓会（仮称）の設立なども、一案であろう。